

よつあみ

～保育者が子どもの時のつづやき～

クラスで四つ編みをすることが流行っていた

わたし 先生、わたしにも四つ編み教えて

先生 A くんにも教えてもらったら？

自分が子どもの時、先生に教えてもらいたかったので、「なんで先生が教えてくれないの？」と思っていたが、大きくなってから考えると、先生は私が A くんのことをあまり好きじゃないのを知っていて、わざと「A くんにも教えてもらったら？」と言ったんだとわかった。

その後、A くんとは四つ編みを教えてもらったことがきっかけで仲良くなった。

おかえり

～保育者が子どもの時のつづやき～

発表会の劇の練習をしていた時

わたし (劇のセリフで) おかえり

先生 今の「おかえり」は、すごく やさしくてよかったよ

発表会の劇で、わたしのセリフは「おかえり」の一言だけでした。

でも、担任の先生がクラスの前でほめてくれた一言がとても嬉しくて、今でも思い出に残っています。

第30回 こどものつづやき

別冊

～保育者が子どもの時のつづやき～

今回、大人から「つづやき」を集めました。子どもの時の、自分の気持ちを思い出して、大人から言われたことや関わりを、自分はどう受け止めてきていたのかについて、書いてもらいました。大人にとっては、些細なことでも、子どもにとっては、傷ついたり嬉しかったり、心に残っているものはたくさんあります。



今、不適切保育という事で、保育者の関わりがニュースになっています。解決のためには、様々な要因があると思います。その一つに、子どもからの発信を、丁寧に受け取っていない(子どもの人権を大切にしていない)保育者の関わりがあるのではないかと思います。「子どもが思っていることに、応答的に関わる」丁寧な保育(質の高い保育)ができていない、うまくいっていないことが、原因の一つではないかと…。つまり子どもが思っていることとすれ違う、うまくキャッチできない、子どもの思いよりも大人の言うとおりにすることがいいことだと思っていたら、不適切な関わりにつながることもあると思います。だから、実際の子ども達の「つづやき」に耳を傾けるとともに、大人も子どものころに思いを馳せてみることで、気づかされることは多いのではないのでしょうか。

わたしは、大人に丁寧に関わってもらえる

価値ある存在！



ちょっとまってね

～保育者が子どもの時のつづき～

通っていた幼稚園に移動動物園が来た時。柵の中に入るのが怖くて、担任の先生に手をつないでもらって入ったが…

わたし こわいから いやだ

先生 大丈夫だよ 一緒に入ろう

(手をつないで先生の後ろから見て回る)

先生 ごめん ちょっと待ってね

わたし いや こわい

先生 大丈夫よ すぐ戻ってくるね

わたし (先生に手を離されて不安になり、近づいてきたくじゃくから逃げると追いかけれ、号泣していると先生が抱っこしてくれた)

先生に手をつないでもらって、入れたのはよかったのですが、先生の言う「大丈夫」は、私にとっては不安でしかなく、離れて行かれると恐怖で逃げ回っていました。

「大丈夫」「ちょっと待ってね」は、私もよく使う言葉ですが、子どもの目線に立って、考えて使わないと、と思っています。

～わたしが子どもの時のつづき～

あなたの、子どもの時のつづきを教えてください。
嬉しかったこと、いやだったこと、子どもに返って思い出してみてください